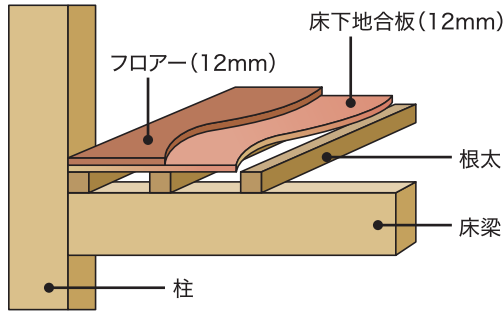


地震や台風時の横からの外力に強い「剛床工法」を採用。

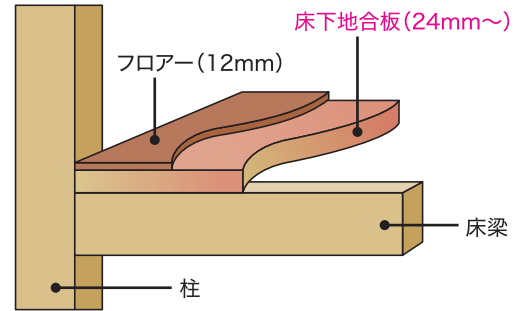
剛床工法とは、床下地に厚い構造用合板を張る事により、水平面のネジレを防ぐ工法です。

在来工法では、梁と床下地の間に根太をはさみますが、剛床工法では通常の2倍以上の厚さの構造用下地合板を梁に直接接合し、厚い合板の力で床の変形を防ぐ、耐震上最も効果的な工法なのです。

■従来工法



■剛床工法



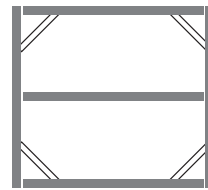
大きな災害から家を守る剛床工法

24mmの構造用合板を直接梁に留め、柱・梁・床面を一体化させる「剛床工法」を採用しています。「剛床工法」で水平剛性を高めることにより、地震や台風発生時に受ける床面の“横揺れ”や“ねじれ”を抑える効果があります。



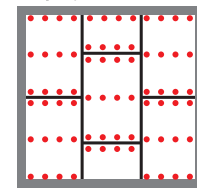
床の強さ・弱さ (軸組工法のみ)

■火打ち梁



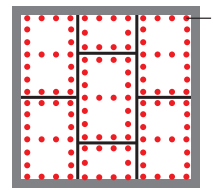
大きく変形する

■剛床-1 (根太工法) 釘が少ない



少し変形する

■剛床-2 釘が多い



ほとんど変形しない

剛床を支える梁

剛床工法を支える梁は、910cm間隔に配置。さらに、梁の振れやゆがみを防止するために1820cm×910cm (畳一帖)の格子状に組み上げます。この骨組みの上に構造用合板を留めることで、水平剛性を高めています。



剛床を支える梁

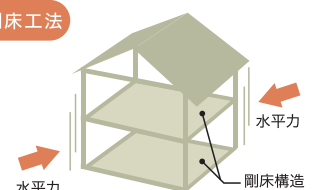
水平面の強度が不足すると、地震などによって外部からの大きな衝撃が加わった際に、建物自体がねじれてつぶれる危険性が高まります。耐震住宅を建てるには、水平剛床 (横からの力、ひねりに対しての対抗力) を確保することが重要です。

剛床なし



床の耐性が低いと、地震などの水平力に対してねじれが生じやすい。

剛床工法



剛床構造のすることにより、剛性を高め、ねじれに強くなる。